

## 地域の語り部となるべく

明治9（1876）年8月盛岡師範学校設置、明治35（1902）年4月盛岡高等農林学校設置、大正10（1921）年4月岩手県立実業補習学校教員養成所開設、そして昭和14（1939）年5月岩手高等工業学校設置となり、明治、大正、昭和と「語り部」のタレントは出揃った。

昭和24（1949）年5月にこれらを統合して、学芸学部（後に教育学部と改称）、工学部、農学部の3学部で構成する新制大学として発足した岩手大学は、その後の平成16（2004）年4月の法人化を経て、平成の最後の年である昨年、創立70周年を迎えることになった。初代鈴木重雄学長は第一回生を迎える入学式で「新制大学は特に人格の陶冶ということに重点を置く。諸君は完全な人格を養い自ら判断行動せねばならない。」と述べ、職業教育や技術教育にとどまらず世界的視野に立って真理を探究し、平和国家の文化を創造していく教養豊かな社会人の育成を目指すとした。岩手大学の船出である。

さて語り部とは、昔から語り伝えられる

昔ばなし、民話、神話、歴史などを現代に語り継いでいる人や集団を指して言うようだ。そう言えば以前に遠野で現地の語り部の話を聞いた覚えがある。あまりに方言がきつかったので分かったような、分からなかったような記憶が残っている。

この4月から令和の岩手大学という語り部の舵をとることになった。2月号の巻頭言で高橋俊和盛岡大学長から紹介があったように「令和」は、初めて日本の書を典拠とした元号であり出典は万葉集からだ。さてその万葉集の中の柿本人麻呂の歌に「しきしまの 大和の国は 言霊の さきはふ国ぞ まさきくありこそ」がある。言葉の力が国に幸せをもたらすと言うことを意味する。言葉やこころには古いも新しいも無く、魂の籠った真心が正に言霊として生き続けるらしい。まさに令和の岩手大学に語り部として地域と共にあっていくかのように聞こえる。文字文化の発達と共に語り部は歴史の中に埋没することになったが、時代を超えても口承と言うものがなくなったわけではない。



岩手大学  
学長

小川 智

令和の今を生きる岩手大学は、これまでもそしてこれからも人文社会科学部、教育学部、理工学部そして農学部の4学部、およびそこから繋がる大学院において「岩手の『大地』と『ひと』と共に」を校是として、学術文化の創造そして幅広く深い教養と高い専門性を備えた人材の育成により、地域社会の文化の向上と国際社会の発展に貢献していく責務がある。そのためには、学生そして教職員が共に「知識創造の場」そして「地域の知の府」として地域に頼られそして尊敬され、愛される大学を共考と協創、共に考え協力して創っていかなくてはならない。社会が抱える課題の解決に速やかに対応するだけでなく、地域産業の興亡を時代と同時進行で観察する「地域の語り部」としての役割を担う高等教育機関として存在し続ける必要がある。

学長として学生だけでなく地域の皆さんに伝えたい。「多文化共生社会を生き抜く力を身に付け、よりよい未来を創造する人となれ」文字としてだけでなく、口承としても。